

1 May 2023

日本ヴィクトリア朝文化研究学会

The Victorian Studies Society of Japan
Newsletter No. 22

小説家の位置

—『ピクウィック・ペイパーズ』と19世紀作家の自己成型—

新野 緑

ディケンズの処女小説『ピクウィック・ペイパーズ』の刊行から12年後の1847年に出た廉価版「序文」が気になっている。『ピクウィック・ペイパーズ』（1836年4月-1837年11月。以下『ピクウィック』）の起源について、「色々風説があるようだが、とにかく自分には初耳の話ばかりで面白かった」（PP 44）との皮肉から始めたディケンズは、執筆に至る経緯を詳しく説明するのだが、作品の起源に関する記述は、月刊分冊完結の直後に刊行された1冊本（1837年11月）の「序文」にはない。それが初めて1847年の廉価版に書き加えられ、その20年後のチャールズ・ディケンズ版（1867年）でも踏襲される。『ピクウィック』以来、矢継ぎ早に『オリヴァー・トウィスト』（以下『オリヴァー』）や『骨董屋』など6つの長編小説を出版して、人気作家としての地位を確立していたディケンズが、この時期になぜ、処女作のオリジナリティを主張する序文を書いたのだろう。

その点で重要な役割を果たすのが、『ピクウィック』の挿絵を担当したロバート・シーモアだ。当時クルックシャンクに次いで知られた諷刺画家シーモアは、小説の第2分冊刊行直前の1836年4月20日に自宅の東屋で猟銃自殺してしまう。急遽、役者の肖像画で有名なロバート・ウィリアム・バスに挿絵を依頼するが、銅板彫刻の技術が未熟だったために、新進の画家ハブロット・K・ブラウンが新たに採用されて、第4分冊以降は、ブラウンがディケンズのペンネームのボズに呼応するフィズを名乗って、挿絵を担当することになる。バスの2枚の挿絵を添えて刊行された第3分冊の「告知文」（5月30日付）では、「各分冊の図版を減らして、本文の量を増やす」（PP 901）方針が示され、『ピクウィック』は完全にディケンズ主導の物語となった。しかも、ブラウンが挿絵を担当した第4分冊にピクウィックの召使となるロンドン子のサム・ウェラーが登場し、それまで曖昧だった主人公の位置付けや人物像が明確になって、第5分冊以降売れ行きは右肩上がり、ディケンズは一躍人気作家の地位に躍り出た。

シーモアの自殺の原因は明らかではない。シーモア自身は妻に「誰も責めてはならない」と書き遺したそうだが（Mrs Seymour, 193-94）、すでに諷刺画家として名をなした彼が、無名に等しい新進作家ディケンズとの主導権争いに、鬱憤を溜めていたことは、多くの批評家が指摘している。遺された未亡人は2人の子供を抱えて困窮し、1840年から何度も支援を求めたのに、ディケンズは応じない。そんな彼には、亡夫や自分への悪意があると、未亡人は周囲に憤懣をぶつけたという。『ピクウィック』の成功を足がかりに今や爆発的な人気を誇るディケンズと、遺された自分たちの境遇との落差に恨みを募らせたシーモア夫人は、1854年に『「ピクウィック・ペイパーズ」の起源について』を書き、『ピクウィック』の真の創作者は亡夫だと主張、さらにそれが1866年の『アシニアム』誌上でのシーモアの息子とディケンズの論争に発展した（No. 2004, No.2005）。つまり、1847年と1867年のディケンズの「序文」は、シーモアの遺族との対立を強く意識して書かれたものにな

る。一方、奇妙なことに、多忙を理由にシーモア夫人への支援を断ったディケンズは、『ボズのスケッチ』2巻本の版元であるジョン・マクロンが1837年に急死すると、その遺された妻子のために、1841年に自ら『ピク・ニック・ペイパーズ』を編纂して支援に尽力したという。『ゲイブリエル・バーデン』（後の『バーナビー・ラッジ』）の執筆契約や、『ピクウィック』を模した月刊分冊形式での『ボズのスケッチ』の刊行をめぐって、当時マクロンと激しく対立していたとはいえ、以前は夫婦ともに親しく付き合った間柄だったから、ディケンズの対応に違いが出るのは当然かもしれない。しかし、ほぼ同じ時期に同様の立場に立たされた故シーモアの未亡人へのディケンズの冷ややかな対応には、単に多忙というだけではない理由が潜んでいるように思われる。それは何か。

『ピクウィック』の起源について、ディケンズ自身は廉価版「序文」で、次のように主張する。すなわち、『ボズのスケッチ』2巻本第1シリーズの刊行直後の1836年に、「1冊1シリングの分冊形式で出す予定の、ある出版物」の企画をチャップマン・アンド・ホールが持ち込んできた。それは、「シーモア氏が作成するある種の図版のためのもの」で、画家が考えたのか、出版社の考えかは不明だが、『ニムロデ・クラブ』の会員が、狩猟や釣りなどに出掛け、技量不足で窮地に陥るという形で物語を始めるのが一番の得策だ」という。しかし、それを陳腐なアイデアとして退けたディケンズは、「自分の好きなように、イギリスの人や物事を、地域を限らず自由に描きたい」と言って、「自分こそがピクウィック氏を考案して第1分冊を書き、そのゲラを元にシーモア氏はクラブとその創設者の見事な肖像画を描いた」と主張する（PP43-44）。作家はまず、シーモア以上に名高いクルックシャンクが『ボズのスケッチ』では文章を元に挿絵を描いた事実にさりげなく触れ、続いて『ピクウィック』の企画が、依頼の時点では未だ内容の定まらない漠然としたものだったことを、「ある出版物（a something）」や「ある種の図版（certain plates）」という曖昧な表現を多用して強調。その上で、シーモアの図版を主とする提案の一切を却下して、ディケンズの「ゲラを元に」シーモアの挿絵が描かれたのだと主張するこの「序文」は、シーモアへの「あの素晴らしくユーモアに富んだ画家」（PP44）という作家の褒め言葉が皮肉に響くほど戦略的だ。そこには、authorとしての自身の権威に対する小説家ディケンズの強いこだわりが見て取れる。

『ピクウィック』創作の発端がシーモアであることは疑いがないにしても、実際の作品がどの程度までシーモア独自の考えによるのかは、じつは当事者以外の信頼できる情報がないために、今なお不明のまま（Cohen 39）。もちろん、印刷技術の発達とともに「イラストレーションという言葉の意味が、言葉による装飾や注釈から、ヴィクトリア朝的な挿絵の概念、つまり文字で書かれた本文を図版によって再現する/高めるもの、あるいはより明確にするもの」に変わり始めた1830年代のこの時期（Golden 22）、20年代から挿絵画家として活躍していたシーモアと、30年代に執筆を始めたディケンズとの間に、本文と挿絵の関係を巡って根本的な意識のズレがあったことは想像に難くない。

シーモアの図版のための本という最初の企画に、ディケンズが「本文から図版が自然な形で生み出される方がはるかにいい」（PP44）と反論し、自分の方の提案が版元に認められたと考えていた事は、『ピクウィック』執筆の依頼を受けた直後の彼が、婚約者のキャサリン・ホガースへの1836年2月10日付の手紙で「チャップマン・アンド・ホールが企画している新しい出版物を、月14ポンドで、完全に僕一人で執筆し編纂するというオファーがあった」（Letters 1:128-29）と告げていることから明らかだ。しかし同時に、この言葉は、彼が『ピクウィック』をいわゆる「小説」ではなく、彼自身が「編纂」する「雑誌」として捉えていたことも示唆する。それは、「ピクウィック・クラブ遺文録」の形を取るこの作品の体裁への配慮だけではない、『ピクウィック』の創作の形、あるいは挿絵と文章の関係に關してきわめて重要なポイントを提起するように思われる。

『ピクウィック』の成功は、安価な月刊分冊という斬新な出版形式の成果でもあったが、当時こうした出版の形は、諷刺画集のように挿絵主体の出版物では一般的でも、巡回図書館向きの3巻本が主流の小説の出版形式としては珍しかった（Wilson 19）。もちろん、キャサリンとの結婚を控えたディケンズにとって、月14ポンドの収入も魅力には違いなかろうが、当時彼は議会報道記者として『モーニング・クロニクル』紙に記事を寄せる一方で、雑誌や新聞にスケッチや物語を寄稿し、それらをクルックシャンクの挿絵入りの『ボズのスケッチ』2巻本に編纂し直すと同時に、政治的パンフレット『日曜三題』（1836年6月）、それに加えて『村のコケット』（7月）や『奇妙な紳士』（8

月)などの演劇作品、さらに新たな小説の構想も練るなど、様々なジャンルの著作をこなしていた。その上 1837 年 1 月発刊予定の雑誌『ベントリーズ・ミセラニー』(以下『ベントリーズ』)の編集長への就任(1836 年 11 月)が象徴するように、彼自身が当時のジャーナリズムを具現するような存在だったのだ。したがって、月刊分冊というシリーズものの作品の企画を、彼が自身の編纂する雑誌のイメージで捉えていたとしても不思議はない。

じっさい、『ピクウィック』と並行して刊行された第 2 作目の『オリヴァー』(1837 年 2 月-1839 年 4 月)は、彼が編集する『ベントリーズ』への連載だから、そもそも小説とジャーナリズムの境自体が当時は曖昧でもあった。1 冊本『ピクウィック』に付された「もしピクウィック・ペイパーズへの苦情が、つまるところ、それが一連の冒険譚に過ぎず、場面もどんどん変わり、登場人物が現実世界で出会う男女のように行き来するということだけなら、この物語は確かにそれ以外の何ものでもないし、英語で書かれた最高の小説のいくつかも、同じ批判に晒されてきた」(PP 41)という「序文」も、雑多な記事が脈絡なく掲載される雑誌と、挿話の連続から成るピカレスク的な 18 世紀小説の伝統とを重ねて見るディケンズの意識を明らかにする。

ディケンズが作家としての自身の権限を、雑誌の編者としてのそれと重ねていたとすれば、シーモアとの主導権争いも、挿絵が主か、本文が主かにとどまらない、より複雑な色合いを帯びてくる。じつは、シーモアだけでなく、クルックシャンクとも『ボズのスケッチ』の第 2 シリーズ刊行時にディケンズは揉めていた。マクロンへの 1836 年 10 月 11 日付の手紙で、作家の原稿の遅さに業を煮やしたクルックシャンクが、「原稿を折々に見て、僕の筆に合うように、ちょっとした変更を提案する権利があると思っていたのに」(Letters 1:183n)と不満を漏らすと、ディケンズは、マクロンへの手紙で、「僕の原稿をクルックシャンクが書き換えるなんて、笑わせるよ」(1836 年 10 月 19 日付 Letters 1:183)と激しく反論してみせた。ところが、およそひと月後のクルックシャンクへの手紙では、『ベントリーズ』に寄稿予定の彼の作品について、挿絵を担当するクルックシャンクに原稿を早めに手渡す約束をするだけでなく、「いい挿絵のアイデアが浮かんだら、喜んで採用する」(11 月 26 日付 Letters 1:198)とまで言っているのである。ディケンズの死後、クルックシャンクは W・J・マクレランへの 1870 年 11 月 11 日付の手紙で、『オリヴァー』は「すべてが僕の考案と助言によるし、登場人物も皆僕のものだ」(Patten 478)と言ったという。この真偽については諸説あるものの、「新作について著者と画家と出版社が毎日アイデアをやりとりする」(Patten 54)のが当時の慣習だったとすれば、小説創作の起源は、そもそもそれ自体が曖昧なものだったと言えよう。その中で、自分の役割を「編者」とするディケンズは、文章や図版の全てをオーガナイズできる存在として自分自身を位置付けようとしていたのではないか。

ディケンズは、1 冊本の『ピクウィック』を 1842 年の著作権法の改正を主導した国会議員トマス・ヌーン・タルフォードに捧げている(1837 年 9 月 27 日付、PP 39)。基本的に著者の生前にしか権利を認めない 1814 年の著作権法を改め、その死後も含め 60 年間の著作権を著者に与えようとするタルフォードの改正案は、1837 年 5 月に国会に提出されると、賛成派のウィリアム・ワーズワスや反対派のトマス・バビントン・マコーレーを中心に、各方面で激しい論戦が巻き起こり、最終的には出版後 42 年、最長でも著者の死後 7 年まで、著者の権利を認める形で成立した。改正案提出直後に初めてタルフォードに会ったディケンズが、すぐさま彼の処女作をこの議員に捧げていることから、当議案に関するディケンズの関心の深さがわかる。

ディケンズはこの時期、『ボズのスケッチ』2 巻本の版元であるマクロンや、『オリヴァー』を連載した『ベントリーズ』の版元リチャード・ベントリーと、出版契約や著作権をめぐる激しく対立するが、こうした対立の背景には、著作権の譲与込みでの出版契約や、文学作品とそれが収められた本や雑誌との区分の曖昧さがある。経済の発展とともに「確かな形を持たない知的財産」が不利を被るようになった時代に、著作権法こそが「文学的な生産行為」の意義を正式に認め、「著者の持つ特殊な才能によって生み出された間接的な公共の利益」を守る正しい手段だと強く主張したのが、タルフォードの議案(Seville 20-25)であれば、彼に対するディケンズの共感、印刷技術の向上や新たな読者層の出現によって出版の形態が大きく変容しようとする 19 世紀初頭のこの時期に、金銭問題のみならず、出版全体における「小説家」の位置づけや権利をディケンズが鋭く意識していたことを証している。

『ピクウィック』執筆時のディケンズは、こうした挿絵画家や出版社との葛藤の中で、時代の様々な力のせめぎ合いを敏感に感じ取り、その力関係の只中に生きる書き手としての自己の立ち位置を模索していたと言えよう。そして彼が経験した新しい社会の複雑なパワーポリティックスは、雑誌や新聞に掌品を寄せるジャーナリスティックな書き手であった彼が、出版形式や作品の構成、そして具体的な情景や人物描写において独自の特質を備えた真の意味での 19 世紀的小説家へと脱皮していく、その原動力ともなった。その点においても 1836 年の『ピクウィック』は、まさにディケンズの小説家への自己成型の過程が記された記念すべき作品と位置づけられるのではないか。

【引用文献】

- Dickens, Charles. "History of Pickwick," *Athenaeum*, no. 2005, March 31, 1866, p.430.
---. *The Letters of Charles Dickens*, vol. 1. Edited by Madeline House and Graham Storey. Clarendon Press, 1965.
---. *The Posthumous Papers of Pickwick Club*. Penguin, 1979. (PPと略記)
Cohen, Jane R. *Charles Dickens and His Original Illustrators*. Ohio State UP, 1980.
Golden, Catherine J. *Serials to Graphic Novels: The Evolution of the Victorian Illustrated Book*. UP of Florida, 2017.
Mrs. Seymour. *An Account of the Origin of the "Pickwick Papers."* William Miller and E.H. Strange, *A Centenary Bibliography of The Pickwick Papers*. 1936; Hassell Street Press. pp. 189-214.
Patten, Robert L. *George Cruikshank's Life, Times, and Art*, vol.2. Rutgers UP, 1996.
Seville, Catherine. *Literary Copyright Reform in Early Victorian England: The Framing of the 1842 Copyright Act*. Cambridge UP, 1999.
Seymour Jr., Robert. "Seymour's Sketches," *Athenaeum*, no. 2004, March 24, 1866, pp. 398-99.
Wilson, A.N. *The Victorians*. Norton, 2003.



ヴィクトリア朝文化研究と英語教科書

佐藤 和哉



多くの幸運とたくさんの方がたのご尽力が重なり、昨年、『〈読む〉という冒険』という小著を「岩波ジュニア新書」の一冊として上梓することができた。言うまでもなく、この新書は、小学校上級から大学生、あるいは社会人までを読者として想定しつつも、メインのターゲットは中学校・高等学校の生徒である。そういう本に携わるなかで、ヴィクトリア朝文化研究を中学生や高校生の学習とつなげていくにはどういうチャンネルがあるか、考えるようになった。日本ヴィクトリア朝文化研究学会が日本の中等教育とどのように関わるか、というテーマは、たとえば、やがて大学生になる高校生、大学に高校生を送り出す高校の教員、また、その前の段階にいる中学生、中学教員、さらに中高生の保護者など、一定の規模をもった集団に対するメッセージとして、学会としても意味があるのではないかと思われる。扱いかたによっては大きな話題ともなりうるものではあるが、小論では、議論の糸口の提供に留まることをお許しいただきたい。

本学会が関わりうる教科としては、その学際的な性格上、外国語（英語）、地理歴史、公民、国語など、多方面から考える必要があるだろうが、本稿では、そのなかでも「外国語（英語）」（以下、「英語」とする）を取り上げる。学会員の多くが大学での英語教育に何らかの形で関わっていると考えられることと、本学会の研究対象のほとんどが英語を用いた資料であることを考えると、この話題設定には比較的無理がないと思われる。以下では、さらに、もう少し限定的に、文学的なテキストと中学校の英語教育の関わりかたについて見ていきたい。これは、第一に、本学会の会員に文学研究者が多く含まれている学会の現状を反映してのことであり、第二に、正しく用いられれば文学作品、文学的なテキストは英語教育に有用であるという立場に本稿が立つからである。

とは言え、戦前や昭和の一時期までならいざ知らず、現在では、文学的なテキストと、中学校や高等学校の英語、とくに中学校英語とは関わりようがないように思われるかもしれない。しかし、平成 20 年（2008 年）1 月告示の中学校学習指導要領に準拠した教科書を調査した三枝和彦によると、教科書会社 6 社の 3 学年分 18 冊を調べたところ、原文のままではないにせよ、O. Henry や Arnold Lobel の作品が複数の教科書会社で収録されているなど、15 件の文学的なテキストの収録、および言及があったということである（3・5）。なお、三枝は、「新学習指導要領に準拠した教科書では、文学教材を軽視する傾向がこれまで以上に強まり、教科書への収録数もさらに減少することが予想される」（3）としているが、平成 29 年（2017）年 3 月に公示された新学習指導要領準拠の教科書、6 社 18 冊について筆者が調べたところ、イソップの寓話や小話、伝記、対話形式（劇）で語られるテキストも「文学的テキスト」に含めるとすれば、1 年生で 10 件、2 年生で 9 件、3 年生で 11 件、計 30 件と、以前の検定教科書よりも増えていることが確認された。このように増えてはいるものの、内容面ではどうか、というのが次の問題である。

三枝が調べた 2008 年の指導要領に準拠した版でも、今回筆者が検討した新学習指導要領に準拠した版でも、*NEW CROWN 1*（三省堂）には、“Alice and Humpty Dumpty” という文章が収録されており（今回は取り上げないが、同じく *NEW CROWN 2* には “Peter Rabbit” という文章も収められている）、ここでヴィクトリア朝文学と接続する。新学習指導要領では、中学校の外国語（英語）には多くの変更が加えられ、仮定法など、従来は高校で教えられていた内容の一部が前倒しにされて教えられるようになったり、修得すべき語彙が、小学校と合わせて 2,400 語を超え、従来の 1.5 倍以上になっていたりするなど、全体として難易度が上がっている中で、それに応じて、同じタイトルであっても、ここで扱うテキストは旧版とは異なっている。以下では、新学習指導要領準拠の *NEW CROWN 1* に収録されている実際のテキストを見ながら、ヴィクトリア朝文学のテキストが中学校における英語教育とどのように関わるものとして提示されているのか、また、その功罪について論じることとする。

この教科書では、“Alice and Humpty Dumpty” は、“Reading for Fun” という補足的な単元のなかで、4 ページの読みものとして構成されている。タイトルの下に、日本語で「アリスが川の土手でうとうとしていると、そこにウサギが通りかかります。アリスはウサギを追いかけていきます。さて、一体どこへ行くのでしょうか。」というリード文が示され、そのあとに本文が始まる。

Alice was sitting by the river. Suddenly she saw a white rabbit. The rabbit looked at his watch and said, “I’m late. I’m late.” He ran into a hole in the ground and disappeared. She followed him.

Alice fell into the hole. Down, down, down, she fell. “How long will I fall?” she thought. Then Alice hit the bottom. She was in Wonderland.

Alice was walking around Wonderland. She saw a big egg on a high wall.

The egg said, “I’m Humpty Dumpty. What’s your name, little girl?”

“My name is Alice,” she said.

“Alice? What does it mean?”

“Does a name have a meaning?” she asked.

“Of course it does. My name means my shape.”

“I see,” Alice said.

そして、ハンプティが巻いているのがベルトかネクタイかという、例の掛け合いに続き、

Alice looked around. “The wall is very high. Please be careful,” she said. “Do you know this song?” she asked.

Humpty Dumpty sat on a wall.

Humpty Dumpty had a great fall.

“Stop!” cried Humpty Dumpty. “Don’t sing that terrible song. I don’t like it at all.” (144-47)



というやりとりが語られて、この文章は唐突に終わる。

この教科書には、著作だけでなく校閲、編集協力に多くの中学校・高等学校・大学の教員が名前を連ねているし、文部科学省による検定も受けているわけだが、それにしても、英語教育の観点からも、文学研究・教育の観点からも、この文章には多くの問題点を指摘せざるを得ない。

第一に、正確さの問題がある。改めて指摘するまでもなく、Humpty Dumpty は *Alice's Adventures in Wonderland* (1865) の登場人物ではない。彼が登場するのは『鏡の国のアリス (*Through the Looking-Glass*, 1872)』のほうである。仮に、『不思議の国のアリス』と『鏡の国のアリス』の両方を読んでいる生徒から「先生、ハンプティは『不思議の国』には出て来ないんじゃないですか？」と指摘された場合、現場の教員はなんと答えたらよいというのだろうか。

第二に、内容理解の問題がある。このテキストは、名前と意味に関するやり取りから、この部分だけを取りだして、“My name means my shape.” とハンプティに言わせているが、これを「私の名前は私の形を意味している」と訳したところで、それで「和訳」はできたとしても、多くの生徒はこの日本語の文の意味が理解できないのではないか（新学習指導要領が要求するように、英語で説明するのであれば、なおさらであろう）。Humpty Dumpty という「名」が「巨大な卵」という「形」を意味している、という文は、多くの生徒にとって、納得しがたいだろう。

そして第三に、このテキストは「物語」として体をなしていない。原作の一部分だけを切りとって書き直して提示するのであれば、ウサギのあとを追って穴に落ちる冒頭の場面は必ずしも必要ではないし（日本語のリードがあるので、引用文の第一段落は不要とも言える）、逆に、冒頭のこの部分を含めるのであれば、最低限でも、穴に落ちたアリスがどうやって元の世界に戻ったのか、を語らなければ、物語はきちんと終わったことにならない。教科書には、上述のように物語への導入はあるのに、それ以降の部分が長い物語の一部であることは日本語でも説明されていないし、この終わりのあとのフォローもないので、極めて中途半端な印象を受ける。このような語りかたの「物語」を読ませて、物語を読んで得られるはずの達成感を生徒が感じるのには難しいのではないか。それでは、こと「物語」に関する限り、実際に英語が「使えた」ことにはならない。

言うまでもないが、小論は、一社の検定教科書の問題点をあげつらうことを目的とするものではない。先に触れたように、教科書の編纂に多くの研究者、教育関係者が関わっていて、かつ、それを文部科学省が検定するものだということを考慮すると、これらの例は、日本の中等英語教育全体のウィークポイントを示していると考えざるを得ない。

このテキストは、読者である生徒がどう反応するか、また、「よい物語」とはどうあるべきであるか、という点に関して、まったく配慮をしていない。英語学習者向け（それも中学生）のためのものであることから、原文そのままでないのは当然だし、書き直すうえで文法項目や語彙の点で厳しい制約があるのはよく理解できる。しかし、何より、このテキストは、「物語」としての分かりやすさや面白さ、文学史上の正しさに対して、きわめて無関心である。作品の選びかたも、ここでのアリスの採用には、中学 1 年生という学年と、いわゆる「児童文学」を直結させた、執筆者と出版社の短絡的な思惑が感じられる。このような無関心さや短絡的思考は、今日の英語教育界の文学に対する態度をよく表していると言えるのではないか。

文学作品は、情意的な反応を生徒から引き出し、英語で書かれた文章に興味を持たせる、といった役割だけでなく、分析的な思考力の涵養という点からも、大いに英語教育に取り入れられるべきであるが、ここで見たように、そのための条件はまったく整っていない。このような状況を踏まえると、日本ヴィクトリア朝文化研究学会、とくにそのなかでも（今回に関しては）文学研究者が日本の中等英語教育に対して貢献しうることは多岐にわたって考えられる。

第一に、文学に対する正しい知識の提供である。教科書である以上、作品についての定説を踏まえたうえでのダイジェストや書き直しであるべきだろう。第二に、作品や場面の選定に対する、専門家としての関与である。ヴィクトリア朝は、確かに児童文学の宝庫ではあるが、中学生ともなれば、翻訳や母語であれば、児童文学ばかりを読んでいるわけではないし、理解出来る世界の範囲は大きく広がっている。そこで、ヴィクトリア朝文学のなかでも、どういう作品がふさわしいか、についての知見を披露し、たとえば中等英語教育の専門家と議論することは有益だろう。一方、仮にヴィクトリア朝文学の作品を取り入れるとすれば、その意義についても、理論的に答える用意が必要

である。現行教科書にルイス・キャロルやベアトリクス・ポターが扱われているために、ヴィクトリア朝文学が教科書に用いられることを前提として、これまで議論してきたが、この前提も、当然問い直されるべきである。中学校の教科書がヴィクトリア朝文学を扱うのだとすれば、なぜ、ほかのテキストではなく、それが用いられるのか、という問いに対しても、研究者は誠実に答えなければならない。そして第三に、もっとも重要なこととして、できあがったテキストが「物語」として評価しうるものであるかどうか、英語の美しさ（文法や語彙が制限されるからと言って、できあがった英文が美しくなくてよいことにはならない）や物語の「面白さ」の観点から、詳しく検討することも、やはり文学研究者の重要な役割である。

以上、小論では、ヴィクトリア朝文化研究が、中等英語教育とどのように関わるか、という問題を、具体的な検定教科書の単元を例にとりながら論じた。今後、高等学校の英語教科書についても調査を広げるとともに（高校教科書では、ケンブリッジ大学出版が発行している教科書が検定教科書として出版されているが、そのなかでヴィクトリア朝文学が用いられている点が注目に値する）、中等英語教育との関わりかたについて理論的な議論を構築する必要もあるだろう。また、これも新学習指導要領で導入されることになる「歴史総合」や「公共」とヴィクトリア朝文化研究との関わりについても考察していきたい。

Works Cited

三枝和彦「中学校英語教科書における文学教材を考察する—アーノルド・ローベル作「お手紙」を例に—」『山形大学紀要(人文科学)第19巻第1号』2018年、pp. 1-16.

根岸雅史ほか、*NEW CROWN 1*. 三省堂、2022.



日本ヴィクトリア朝文化研究学会 2022 年度総会

日時：2022 年 11 月 19 日（土）16 時 40 分～17 時

場所：早稲田大学戸山キャンパス、Zoom（司会 玉井史絵事務局長）

議題

【報告事項】

1. 2022 年度活動報告・活動予定

I. 運営委員会、役員会関係

運営委員会・理事会

2022 年 9 月 12 日 第 1 回 運営委員会 (Zoom)

2022 年 11 月 18 日 理事会 (早稲田大学戸山キャンパス)

2023 年 3 月 第 2 回 運営委員会 (Zoom)

大会企画・準備委員会

2022 年 8 月 4 日 第 1 回 大会企画準備委員会 (Zoom)

2023 年 1 月 第 2 回 大会企画準備委員会 (Zoom)

学会誌編集委員会

2022 年 1 月 第 1 回 編集委員会 (メール審議)

2022 年 8 月 第 2 回 編集委員会 (メール審議)

II. 学会誌、ニューズレター

2022 年 5 月 *The Victorian Studies Society of Japan Newsletter* No. 21 発行

2022 年 11 月 『ヴィクトリア朝文化研究』(*Studies in Victorian Culture*) 第 20 号発行

III. 全国大会関係

2022 年 11 月 19 日 第 22 回 全国大会開催 (早稲田大学戸山キャンパス)

*対面と Zoom のハイブリッド形式で開催

◎会員動向 対象期間：2021 年 4 月から 2022 年 3 月まで
 新規入会者 12 名 退会者 10 名
 2022 年 3 月 22 日現在 会員 323 名（うち学生 24 名）

2. 学会誌について
上記の通り、発行された。
3. 大会・企画委員会の活動について
高橋美帆大会・企画委員長より、大会・企画委員の各氏が 2023 年度大会の準備を進めると共に、学会を活性化するための企画を計画中であることが、報告された。
4. 学会企画事典の進捗状況について
大石和欣事典編集委員会副委員長より、事典の計画の進捗状況が報告された。
5. その他
特になし。

【審議事項】

1. 2021 年度決算
資料に基づき報告され、了承された。
2. 2022 年度予算案
資料に基づき報告され、了承された。
3. 2023 年度の大会について
第 23 回大会は、2023 年 11 月 18 日（土）に関西大学千里山キャンパスにて開かれる予定であることが報告され、了承された。
4. その他
『ヴィクトリア朝文化研究』の J-Stage 登録に向けて、手続きを進めていくことが承認された。

2021 年度決算報告書（2021.4.1-2022.3.31）

【収入の部】

単位：円

項 目	金 額	備 考
前年度繰越金	5,667,191	
利子	10	ゆうちょ銀行（総合講座）より
出展料	0	
学会費	1,788,000	
学会誌販売	3,310	3 冊（郵送費含む）
大会補助金	100,000	開催校同志社大学より支給
合 計	7,558,511	

【支出の部】

項 目	金 額	備 考
通信費	51,467	振込票や学会誌送付に係る郵送費

大会経費	110,193	大会講演講師謝礼、ポスター代等
懇親会費	0	
サーバーレンタル代	9,721	更新料含む
学会誌作成・郵送費	822,420	
学会誌用図書費	73,288	書評図書
振込手数料	1,404	振込、振替時に生じる手数料
消耗品費	473	コピー用紙、インク等
役員会費	0	会場費
役員交通費	0	
非会員謝礼・交通費	20,000	学会誌書評執筆者×2名
事務局員謝礼	240,000	月 10,000 円×2名
学生会員奨励金	20,000	大会発表学生会員×2名
合 計	1,348,966	
次年度繰越金	6,209,545	

以上の通りご報告いたします。

2022 年 8 月 8 日 会計 玉井 史絵

上記の報告は監査の結果、正確であることを認めます。

2022 年 8 月 29 日 会計監査 並河 葉子

2022 年度予算案 (2022.4.1-2023.3.31)

【収入の部】

単位：円

項 目	金 額	備 考
前年度繰越金	6,209,545	
利子	10	
学会費	1,788,000	
出展料	0	
学会誌販売	2,000	
大会補助金	0	
合 計	7,999,555	

【支出の部】

項 目	金 額	備 考
通信費	52,000	2021 年度 51,467 円
大会経費	340,000	2021 年度 110,193 円
懇親会費	40,000	
サーバーレンタル代	10,000	
学会誌作成・郵送費	830,000	2021 年度 822,420 円
学会誌図書費	80,000	書評用図書 2021 年度 73,288 円
振込手数料	2,000	
消耗品費	5,000	文具等 2021 年度 473 円
役員会費	0	理事会、運営委員会、編集委員会
役員交通費	300,000	運営委員会、編集委員会
非会員謝礼、交通費	20,000	
学生会員奨励金	20,000	
事務局員謝礼	240,000	月 10,000 円×2名
合 計	1,939,000	

次年度繰越金	6,066,555	
合 計	7,999,555	

注) 本予算案は対面での大会開催を想定したものです。

第 23 回大会のお知らせと研究発表の募集

第 23 回大会は、2023 年 11 月 18 日（土）に関西大学千里山キャンパスで開かれる予定です。シンポジウムの題目は「ヴィクトリア朝における人形と人形劇」（仮）で、司会・講師は松本靖彦氏（東京理科大学）、講師は岩田託子氏（中京大学）、加藤匠氏（明治大学・非）の予定です。

特別講演は瀧見英明氏（人形劇の図書館館長、人形劇トロッコ代表）をお願いすることになっています。予定のテーマは「日本の現代人形劇にヴィクトリア朝様式がもたらしたものはなにか」（仮）で、人形劇の実演も行なっていただく予定です。また大会翌日の 11 月 19 日（日）には、国立文楽劇場にて文楽鑑賞を行うエクスカッションを予定しております（要事前予約）。午後早い時間に終了する第 1 部の観劇を行う予定で、遠方からご参加の先生方も余裕をもって観劇できる時間帯を考えております。詳細につきましては、追って学会メーリングリストにてご連絡を差し上げます。どうぞ奮ってご参加ください。

研究発表（発表時間 30 分、質疑応答 15 分）を希望する会員は、発表要旨（400 字）と略歴（氏名、所属、住所、電話番号、メールアドレスを明記）および主要業績を記した Word ファイルを、日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局まで、メールにてお送りください。送信後 3 日以内に受領確認の返信が届かない場合は、お手数ですが再送をお願いします。**締め切りは 2023 年 7 月 10 日（月）必着**です。

本学会は学生会員の研究活動を支援し、研究発表を奨励する目的で、運営委員会と理事会の議を経て、「学生会員大会研究発表補助金規定」を制定いたしました。大会研究発表を行う当該年度に本学会の学生会員である者を対象に、10,000 円を支給いたします。（ただし、この補助を受けた会員は大会後最低 2 年間、会員として在籍しなくてはなりません。）詳細は、事務局までお問い合わせください。

なお現時点で対面とオンラインを併用しての実施、また学内レストランで対面による懇親会も計画しておりますが、今後の新型コロナウイルスの状況によっては、各種計画に変更が生じる可能性がございます。どうぞあらかじめご了承ください。

第 24 回全国大会シンポジウムおよびラウンドテーブルの企画募集

2024 年 11 月下旬に開催予定の日本ヴィクトリア朝文化研究学会第 24 回全国大会（開催場所と日時は今年の 8 月に決定される予定です）における、シンポジウムおよびラウンドテーブルの企画を募集いたします。シンポジウム、ラウンドテーブル、それぞれ 2 時間 30 分程度（15 分間の休憩を含む）の時間枠を予定しております。**締め切りは 2023 年 10 月末日（火）必着**といたします。

シンポジウムおよびラウンドテーブルの内容は、本学会の設立趣旨に沿い、広くヴィクトリア朝文化に関わる学際的な視野をもつものが望ましいと考えております。なお、企画の採否については、運営委員会（2024 年 1 月開催予定）で決定させていただきます。ご了承ください。

- 応募締め切り：2023 年 10 月末日（火）必着
- 申請方法：下記の申請書必要記載事項を記入した Word ファイルを、日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局まで、メールにてお送りください。
- 申請書必要記載事項
 - ① シンポジウム・ラウンドテーブルのタイトル
 - ② 趣旨（400 字程度）
 - ③ 企画立案者（氏名、所属、連絡先住所、電話番号、メールアドレス）
 - ④ プログラム

1)司会（氏名、所属）2）報告者（氏名、所属）3）各報告者の題目および報告要旨（200 字程度）4)タイムテーブル（全体で 2 時間 30 分程度〔休憩含む〕に収まるように計画してください）
＊シンポジウム・ラウンドテーブルに参加いただく非会員の方には、交通費、宿泊費、謝金をお支払いいたします。

4. 提出先：日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局

〒610-0394 京田辺市多々羅都谷 1-3

同志社大学グローバル・コミュニケーション学部 玉井史絵研究室内

Tel: 0774-65-7223

E-mail: victorianstudies.japan@gmail.com



編集後記

世界中に混乱を引き起こしたコロナ禍もようやく収束しつつあるようです。第 22 号には新野緑先生と佐藤和哉先生が玉稿をお寄せくださいました。日々、ご校務・ご研究で大変お忙しい中、誠にありがとうございました。今号が最後の編集となりました。拙い作業にもかかわらず、4 年間、多くの先生方から温かいご協力をいただきました。この場をお借りして、深くお礼申し上げます。（NL 担当 杉村醇子）



発行：日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局
〒610-0394 京田辺市多々羅都谷 1-3
同志社大学グローバル・コミュニケーション学部
玉井史絵研究室内
T E L : 0774-65-7223
E-mail: victorianstudies.japan@gmail.com
発行日：2023 年 5 月 1 日